

教育現場における‘情動調整’を目指した取り組みⅡ

～情動調整を窓口とした子ども理解とアプローチ～

企画者：香野 毅（静岡大学教育学領域）

司会者：香野 毅（静岡大学教育学領域）

話題提供者：島田直人（静岡市立賤機南小学校）

深澤雄紀（静岡県立藤枝特別支援学校）

指定討論者：船橋篤彦（広島大学大学院教育学研究科）

KEY WORDS: 情動調整 教育現場 認知・行動・身体・情動

【企画趣旨】

長いスパンで見れば、障害のある子どもへの教育や心理の領域における支援方法や指導目標は、より全体性、広範性を求めてきた。ある支援方法は、それまで主流的に用いられてきた支援方法の不足を補うことで、確立してきた側面がある。それは単なる‘それまで’への批判による台頭ではなく、包括的支援を目指すという意味で価値がある。

包括的支援には多様な視点がふくまれる。そのひとつは幅広い発達の領域から子どもを理解し支援することである。姿勢・運動、知覚・認知、行動、社会性、コミュニケーションなどの領域についてより深く、そして相互に関連付けながら子どもを理解しアプローチすることが可能になってきた。ここに「情動」を加えるというのがこのシンポの趣旨である。

情動や感情は、子ども理解と支援において、これまで軽視されてきた対象ではなかったが、扱いにくい対象ではあった。従来情動は、行動や認知の結果もたらされる後付的な「装饰品」(A R. Damasio, 2005)や、理性や認知と対立的に位置付けられ、混沌をもたらす非合理的な「ならず者」(遠藤, 2013)としての扱いを受けてきた。一方では、日々の子どもの姿において情動ほど彼らに混乱と豊かさをもたらすものはないと、保護者や支援者は実感してきた。

近年、心理学における情動の位置づけも徐々に変わってきている。情動のもつ機能性や合理性に注目する立場が主流になりつつある。そこでは発達における情動の役割なども見直されつつある。同時に、情動そのものがもつ規則性も明らかになってきた。

一方では、サーツモデルや社会性と情動の学習など、情動を対象とするアプローチが出てきた。サーツモデルでは、情動調整能力をASD児があらゆる学習の機会に能動的に参加するための決定要因とし、ASD児の情動調整を自己調整と相互調整に整理し、その形成と支援を提供する。

前回のシンポ（高知大会, 2014）では、特別支援学級や特別支援学校における情動調整の取り組みに関する三件の実践を紹介した（詳細は、実践障害児教育, 2015(6)）。そこでは以下のことが見出された。

・ある対象へ場面への緊張や不安の緩和といった情動調整が獲得されるとともに、その調整方略が他の場面へと般化を示

した。

・不安に対する情動調整と、怒りに対する情動調整には質的な違いが見出された。

・共通して、教師との相互調整が展開された後に、自己調整行動が出現する傾向にあった。

・教師と協働して取り組んだ自己調整方略が、その後の生活においても自発的に活用されていた。これはサーツモデルでいえば、メタ認知方略とすることができる。

さて今回のシンポでは、2名の教員から情動調整を目指した取り組みを報告してもらう。

そこから、情動調整に焦点を当てる必要性、具体的なアプローチの方法、変容メカニズムなどについて議論ができればと願っている。また教育現場における情動調整の位置づけについても話題としたい。

【話題提供者の趣旨】

島田：特別支援学級に在籍する児童への支援の報告である。ASDの特性を抱える児童は、ストレスイベント（苦手な活動への参加、予想外の出来事等）に遭遇した際の情動不全から行動調整が困難な状態に至りやすい。そこで、情動を整えることを目指した支援から、適応的、社会的に望ましい行動につながったエピソードを紹介したい。

深澤：特別支援学校高等部におけるサーツモデルを活用した実践事例である。情動調整に視点を当てることにより、子どもたちの学習への参加（エンゲージメント）に与える効果について検証した。教師が情動調整の視点をもつことで、子ども理解が深まり、ニーズに応じた支援方法をチームで共通理解していくプロセスについて事例を通して紹介したい。

【指定討論者の趣旨】

児童生徒の「情動調節」について、教育現場における現状と今後の課題を整理する。また、合理的配慮や社会参加の観点から踏まえて、何故、「情動調節」に焦点をあてる必要があるのかについて討議を行うこととしたい。

(KONO Takeshi, SHIMADA Naoto, FUKAZAWA Yuki, FUNABASHI Atsuhiko)